

探究のポイント

第13回

このコーナーでは、「総合的な探究の時間」や各教科で「探究」を実践する上でのポイントを、高校事例等から見ていく。4・5月号に続き、大阪教育大学附属高等学校平野校舎を紹介する^(注)。今回は、探究学習の指導方法『平野メソッド』を中心にお話をうかがった。

大阪教育大学附属
高等学校平野校舎の
「探究のポイント」

- ◆探究を“楽しむ”ことを狙いとしたツールを「平野メソッド」として体系化
- ◆探究学習に必要な考え方や姿勢を学ぶことで、生徒の日常行動にも好影響
- ◆探究の“面白さ”を感じさせる「イノベティブシンキング」の授業を導入

探究学習だけでなく生きる力にもつながる 指導ツールを「平野メソッド」として確立

大阪教育大学附属高等学校平野校舎

「大量探究時代」を迎えるにあたり 教員用の指導ツールの必要性を痛感

大阪教育大学附属高等学校平野校舎（以下、平野校舎）では、探究学習の指導に使えるツールを「平野メソッド」として体系化し、1冊の本にまとめている<図1>。そのツールを使った授業で活用できるワークシートも別途用意しており、これらを使って探究学習を体系的に進めている。

「平野メソッド」が誕生した背景には、2015年度のSGH（スーパー・グローバル・ハイスクール）への採択がある。グローバル人材がどのような能力を持っているのかを詳細に分析し、「課題解決力」「コミュニケーション力」「多文化理解力」「セルフマネジメント力」としてまとめ、平野校舎で重点的に育成する「4つの力」（コンピテンシー）とした。そして、これらの力を探究学習で身につけていく仕組みを構築した。

ただ、SGHに採択された2015年度、探究学習はまだ端緒についたばかりで、指導方法を模索しながらのスター

トだった。SGH 2年目の2016年度から平野校舎に着任した山崎勝載先生は、当時のことを次のように振り返る。

「私は大阪府立の高校から人事交流で平野校舎に赴任しました。SGH 1期生の研究発表ポスター

を見たとき、充実した内容でしっかりまとめられたポスターもある一方で、フィールドワークで聞いてきたことをそのまま書いただけのようなポスターもあり、指導によって成果に差が出てしまっていることが気になりました」山崎先生は、ループリックやポートフォリオ、SDGsという言葉さえ馴染みがなく、どのように探究学習を指導したらよいかわからない状態での赴任だったというが、2022年度から探究学習が学習指導要領に入り、やがては“大量探究時代”とも呼べる状況が到来することは予測していた。すべての高校生に探究学習を指導するには、探究学習の指導に使えるツールやワークシートなどがあった方がよい。



山崎勝載 先生

(注) 4・5月号の記事は、電子ブックでもお読みいただけます (https://kawaijuku.meclib.jp/gl2022_45/book/index.html#target/page_no=38)。

また、今号p.35に掲載の河合塾主催「トークセッション 先生のしくじりから学ぶ『総合的な探究』の困難と希望」に、平野校舎の松田主幹教諭が登場します (<https://www.kawaijuku.jp/jp/news/detail.html?id=501>)。

図1 「これでわかる! 探究学習の指導—生徒の主体的な学びの実現をめざして—」の冊子



HPからオンライン版(PDF)やワークシートなどを無料でダウンロードできる(<http://hirano-h.cc.osaka-kyoiku.ac.jp/method2>)。

山崎先生は着任直後からこうしたことを意識し、3年間かけて授業で実践し、SGH担当教員らと効果があったものを「平野メソッド」としてまとめ、2019年春に冊子化した。平野校舎は2020年度からSGHの後継事業であるWWL(ワールド・ワイド・ラーニング)の拠点校にも採択されたが、その探究学習でも「平野メソッド」が活用されている。

「平野メソッド」を使った学習で 自らの行動を変え始めた生徒たち

「平野メソッド」は、どのような方針でまとめられたのか。探究学習は、生徒が主体的に取り組んでいくことが前提になっている。しかし平野校舎がSGHで掲げたテーマは「多面的に“いのち”を考える」というもので、高校生が主体的に取り組むにはやや難しい面も見られた。しかも2016年当時は、大学生向けに研究のまとめ方を指南するような本はあっても、高校生の探究学習指導の参考になるような本はほとんど存在していなかった。

「高校教員用の探究学習指導書がないのであれば、自分たちで作っていかないと考えました。そこで役立ったのが、以前勤めていた学習困難校での経験でした。生徒に授業を受けてもらう以前に、自分から学校に行きたいと思ってもらう工夫が必要でした。子どもたちは放っておいても遊び始めます。遊ぶことが楽しいからです。楽しければ、人は主体的にかかわるようになります。遊

図2 ダイバーシティ・ワーク



びの要素を探究学習につなげることができれば、主体的に学び始めるのではないかと考えたのです」

探究学習の指導方法を構築するにあたって、山崎先生が最初に考えたのは「問いづくりのワーク」だった。従来型の授業では、生徒は教員の発問に対して正答を見つけにいくだけで、自分自身で何かを問うことはほとんどない。だから問いを立てると言われてもすぐにできるわけではない。しかし、世の中には知りたいこと、不思議なこと、解明したいことがたくさんあるはずで、もしそれが少しでもわかると人に伝えたいのが人間の本質だろう。その部分を引き出すことで、生徒が勝手に探究を始めるようになることを期待したのだ。

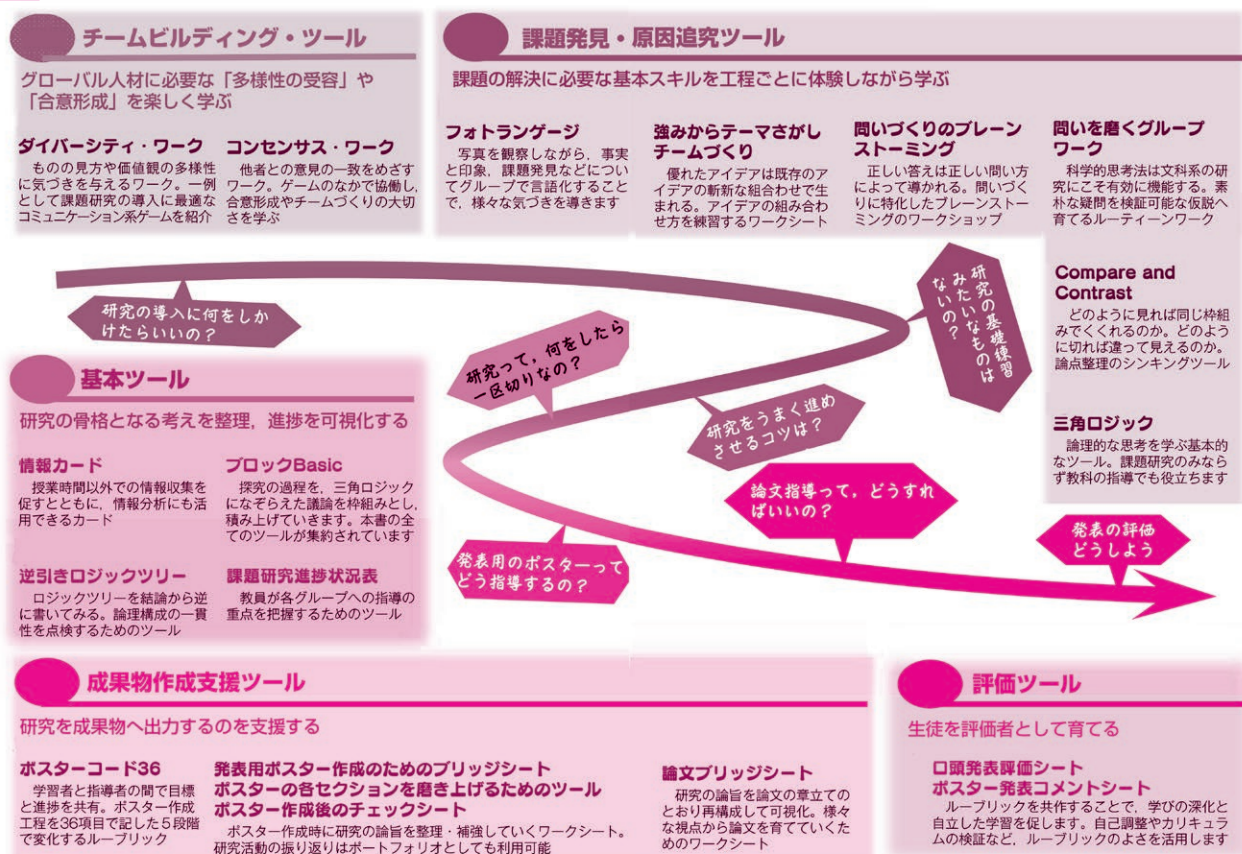
ただ、問うことはできてもすぐには探究学習へと発展してはいかなかった。SSHの課題研究と比較して、SGHでの探究学習の難しさについて考えた。

「グローバル課題の探究には、多様性を認めつつ合意形成をめざすジレンマがあることに気がつきました。多様性は発散志向、合意形成は収束志向と、逆のベクトルを持っています。その間を行き来しながら解決をめざすのが、グローバル課題の探究のひな型です。そこで、多様性と合意形成を探究の軸にすることにしました」

多様性と合意形成について理解するために、ゲームを取り入れた。多様性の場合、絵合わせのようなカードゲームを使った(ダイバーシティ・ワーク) <図2>。同じ絵からまったく別のことを発想する人がいることから発展させて、1つの事実から多様な気づきが得られることが理解できるようになった。また、合意形成では、月で遭難した宇宙船が、母船に戻る時に持っていくアイテムの順位を決める「NASAゲーム」を取り入れた(コンセンサス・ワーク)。多数決ではなく全員が納得できる解決策を決定するゲームだが、多くの場合、1人の独断よりもチームの合意がある方が高い生存率になるこ



図3 『平野メソッド』の全体構成図



(<http://hirano-h.cc.osaka-kyoiku.ac.jp/method2>)

とがわかっており、合意形成の難しさや重要性を学ぶことができた。

「多様性と合意形成について学んだ生徒たちは、やがて自分たちの行動を変えていくようになりました。探究学習とはまったく関係ない学校行事、たとえば遠足の行き先や文化祭の出し物を決める際も、まず決定の仕方から決めるようになりました。安易に多数決で決めることがなくなり、少数者の意見を無視しなくなるなど、学校生活全般に好影響を及ぼすようになってきました」

探究学習や課題探究の流れに沿って 指導に役立つ多彩なツールを満載

冊子としてまとめられた「平野メソッド」には、高校での探究学習の流れに沿って必要なツールが紹介されている<図3>。最初にあるのは、グループワークを始める際に必要となるチームづくりを支援する「チームビルディング・ツール」だ。次に課題解決の基本的なスキルを学ぶ「課題発見・原因追究ツール」、そして探究の骨格となる考えを整理し、進捗状況を可視化する「基本ツール」、さらに研究成果をまとめるのを支援する「成果物作成支援ツール」と続き、最後に自分や他人の研究を

きちんと評価できるようにする「評価ツール」がある。また、各ツールの中にはゲームやカードなど複数の素材が含まれている。

『平野メソッド』の冊子は、教室での授業を想定してまとめているが、教室での探究学習とあわせてフィールドワークも重要な要素です」

教室での探究学習は、「平野メソッド」に沿って指導することができるが、流れを厳密にたどっていくような指導マニュアルの形はとっていない。学校や授業、生徒の実情に合わせて使うことを想定している。教員が指導に主体的に向き合うことで、はじめて各ツールが機能するように構成されているわけだ。

平野校舎の場合は、WWLの課題探究科目「グローバル探究Ⅰ～Ⅲ」で「平野メソッド」を活用している。第1学年の授業では、探究に必要なスキルを学ぶと同時に地域のグローバル課題の学習も進めている。第2学年はアジアのグローバル課題をテーマにして探究を続け、成果をポスターにまとめている。3年生は2年間の探究学習の成果を、個人ワークとして論文にまとめたり、学部探しを通じて進路探究につなげたりすることになる。

平野校舎では多くの教員がツールを使いこなせるよう

になっており、当初のワークシートをより使いやすいように改訂したり、新しいワークシートを作ったりして授業に活用している教員が多いという。ちなみに、平野校舎では毎年、全国から探究学習に携わる教員や教員志望の大学院生、教育関係者らが参加する研修交流会を開催している。この交流会で共有した「平野メソッド」を参考にし、各高校の状況にあわせて使っているケースもあるが、公開している「平野メソッド」のツールやワークシートをそのまま使っているケースも多いそうだ。

「平野メソッド」では伝えられない 論理から飛び出した「面白さ」を追求

「平野メソッド」として体系化し、指導ツールとしてまとめたことによって、探究学習の指導経験によらず、一定の型に沿って探究学習が指導できるようになった。指導ツールの作成をめざした当初の目的は達成できたといえるが、同時に次なる課題も見えてきたという。

「遊びの要素を取り入れた『平野メソッド』を用いても、探究を楽しみとは思っていないと思われる生徒もいました。遊びと同じで楽しければ続けられるわけですから、どこかに負担感があるのでしょうか。確かにこれらのツールを使えば、探究を論理的に進めていくことはできますが、その探究が面白いかは別の話です。しかし、論理を飛び越えた『面白さ』を指導できるスキルや評価軸は、高校現場にはなかったのです」

山崎先生は、これまでの探究学習に、教科の壁、学校の壁、遊びと学びの壁という3つの壁を感じていた。これらに風穴を開けることが『面白さ』につながるのではないかとの考えは、WWL指定後の「グローバル探究」と並行して学ぶ2つの独自科目にも反映している。

その1つが、第1学年で学ぶ「データサイエンス基礎」だ。多くの物事の裏側にはデータがあり、プログラムを通してデータが処理・分析され、物事が動いていく。それを理解することで、教科の壁を越えて文理融合的な考え方に触れると同時に、データに即して判断できる力を養うことを目的にしている。

もう1つが、第2学年で学ぶ「イノベティブシンキング」だ。これには発想力によって3つの壁を越える力を身につけようという狙いがある。

「この授業は、『デザイン思考』の方法をモデルに開発

しています。学校と『プロ』（研究者や企業のコンサルタントなど）をつなぎ、学校との壁を越える共通言語がデザイン思考です。現場のニーズを伝えてとりあえずの解決策を考案し、試行してみるという『デザイン思考』の発想法は、社会課題の解決にも応用できます。フィールドで当事者も認識していないニーズや、言語化できない不満などを、ラフスケッチのようなとりあえずの形にしていくといったもう1つの探究学習に、どんどん取り組んでもらいたいと思っています」

具体的な課題の1つとして取り組んだのは、新しい授業づくりだ。地球儀にスマートフォンやタブレットをかざすと、気象情報がリアルタイムで見られるアプリを教具として利用し、高校生が附属小学校の児童に向けて、地球課題をわかりやすく伝える授業を考案するというものだ。現在ある技術から発想を飛ばして今までにない授業を創り出すことになるため、イノベーションになるし、ある種の遊び感覚にもつながっており、遊びと学びの壁を越える原動力にもなったという。

今年度から、「総合的な探究の時間」が必修となり、多くの学校現場でさまざまな取り組みが本格していることだろう。最後に山崎先生から、探究学習の指導に携わる教員の方々に向けてメッセージをいただいた。

「探究学習の指導ツールを1冊にまとめることができたのは、本校の教員チームのおかげです。面白そうだからやってみようかという雰囲気になり、学校全体で取り組む機運が高まっていったからです。生徒に主体的に探究へと向かわせるためには、教員自身が面白がって、主体的に授業に取り組むことが重要です。その教員の姿勢がいちばん生徒に伝わるからです。どんなに小さなアイデアでも、教員発の主体的な取り組みを応援してくれる人が1人でも2人でもいれば、魅力的な探究学習の実践につながっていくのではないかと思います」

大阪教育大学附属高等学校平野校舎

◇所在地：大阪市平野区流町2-1-24

◇創立：1972（昭和47）年

◇卒業生数：2022年3月卒業生117名

◇卒業生の進路：国公立大41名／私立大49名／短大1名／その他26名